

波野村史

平成十年三月二十五日 印刷
平成十年三月三十一日 発行

編集 波野村史編纂委員会
発行 波野村

熊本県阿蘇郡波野村大字波野二七二〇
電話 〇九六七―二四―二〇〇一

印刷 株式会社 きょうせい

高等小学校の修業年限が二カ年となった。

教育行政の基本方針を樹立するため、大正六年（一九一七）〜八年に臨時教育会議、一〇年に教育評議会、一三年には文部審議会が設けられて教育改善方策の審議にあたった。

文部省はこの答申によって、教育の充実改善の案を立て実施した。そして各小学校ごとに二カ年の高等科が整備され、その進学率は著しく向上した。高等小学校は義務制ではなかったが、実質的には義務就学に近い結果となり、小学校教育は年を逐って充実された。

三 義務教育費国庫負担

小学校教育の義務制は弱小町村には財政的には大きな負担であり、円滑な教育財政を確保することは容易ではなかった。大正七年（一九一八）に市町村義務教育費国庫負担法を公布して、教員俸給の一部を国庫が負担することとなった。しかし、教育器材の購入等に要する市町村の財政を助けるほど国庫の教育費支出は充分ではなかった。

昭和一五年（一九四〇）義務教育費国庫負担法によって経費の半額を国が負担、昭和二三年（一九四八）市町村立学校職員給与負担法によって市町村立の小、中盲聾学校職員の給与が都道府県の負担となった。

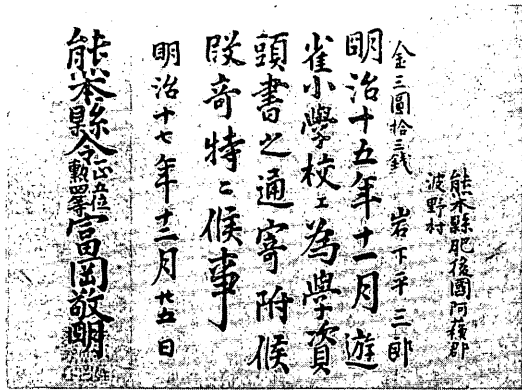
昭和二七年（一九五二）義務教育費国庫負担法によって義務教育費の無償の原則が立てられ、教育の機会均等とその水準の維持向上のために国が必要な経費を負担することになった。この法によって経済的に裕福な市町村も貧村も児童の教育の面では較差が解消された。

四 戦時下の教育と沖繩学童疎開

昭和六年（一九三一）満州事変が勃発すると教育の面にも戦時色が強まり、昭和一〇年には従来の青年訓練所と実業補習学校が一つになって青年学校が設置され、昭和一二年七月（一九三七）日中戦争の発生によって教育行政の上にも戦時下教育という考え方が強く示されるようになった。昭和一六年（一九四一）小学校令が



明治13年修了書



附寄資学

改正され、国民学校令が公布された。これによって明治以来国民に親しまれた小学校の名称が国民学校と改められた。本村でも榎木野国民学校、遊雀国民学校、小池野国民学校というように名称を変えた。これは、国民教育の面目を一新することを期するもので、小学校の軍事色も濃くなった。そして、この年の一二月第二次世界大戦に突入す



昭和21年9月19日(1946)沖繩帰還を前に遊雀校々庭にての記念撮影。写真右側のトタン屋根校舎が遊雀寮として貸与されていた

るや、戦時教育は更に強化され、国民学校も臨戦体制下の教育となり、中等学校生徒は軍需工場で働かされた。いわゆる学徒労働員である。国民学校の児童も食糧増産の農事に働かされた。本村でも高等科の児童が中心となり学校農園でさつま芋やそばをつくったり農家で草取りなどの作業に従事した。昭和十九年(一九四四)には青年学校が独立した。従来の青年学校の校長は国民学校長の兼務であったが、新たに校長が任命された。本村でも波野青年学校となり軍事教育が更に強化された。

昭和二〇年(一九四五)三月には「決戦教育措置要綱」が閣議で決定された。これは国民学校初等科を除き、学校における授業を原則として四月から向こう一か年間停止するというもので、これに基づき「戦時教育令」が公布された。

本村では、高等科の児童は晴天の日は農園や運動場を耕した畑でとうもろこしやさつま芋、そば作りの作業をし、雨天の時は教室で学習をした。初等科の児童は榎木野、赤仁田、滝水、仁田水、中江、山崎の集落ごとに集まり、晴天の時は農家の草取り等の手伝い、雨の日はお宮の拝殿などで学習をした。この集落毎の分散教育には阿蘇高等女学校(現阿蘇高等学校)の生徒も加わった。

せん烈を極める戦局の中で沖縄県から学童が疎開してきた。波野村には昭和十九年(一九四四)八月に内牧に疎開した首里第二国民学校の児童が内牧駅が焼夷弾で焼け、田んぼにも弾が落ちるようになり、昭和二〇年

七月に榎木野国民学校と遊雀国民学校に、それぞれ五〇余名の児童と教師二名が保母の方などに引率されて再疎開してきた。九州に行けば汽車に乗られる、冬になれば雪が見られると子ども心に思ってきたのに、思い出に残るのは寒かったこととひもじさの毎日だった。

校舎の二教室で五〇余名の人たちが自給自足にちかひ生活、配給のとうもろこしは粒入りのまま、これを近所の農家の石臼を借りて粉にして折々の野菜等を入れてお粥にしたものが主食、育ち盛りの児童にとっての空腹はさぞ辛かった事だろう。沖縄に帰って榎木野小学校で生活した人たちは「榎木野会」を、遊雀小学校で生活した人たちは「遊雀会」を組織し今も交流を続けている。それこそ小学生を中心に数少ない引率の先生方や縁故の人たちが、二年半余りの年月を異郷の地で寝食苦楽を友にしての淋しくて不自由な疎開生活であった。

参考

榎木野会の大城孝成の述懐

私は四五年前榎木野小学校に疎開していた者です。当時二〇歳で川崎市の鉄工所で働いておりました。爆撃は毎日激しくなる一方で、知人の居る安全な所に疎開することになり、森田先生や石川先生の御好意により榎木野小学校で野菜作りや買い出しの手伝いをしておりました。

そうした晩秋のある日、榎木野から一里(四里)ぐらひ離れていた集落ではなかったかとおもいますが、そこに児童五、六人をつれて行ったときのことです。買い出し買物をついで、疲れはてて帰途についてしばらくした頃、急な大雨がきて皆ずぶ濡れになって途方にくれてしまいました。雨宿りする家も木陰も見当たりません。寒くはなる、日は暮れかける。丁度その時、馬に乗ってくる二〇歳ぐらひの青年とすれ違いました。「この近くどこか雨宿りするところはありますか」と尋ねました。するとその青年はしばらく考えておりましたが、「そんなところはありませぬ」と言って通り過ぎてしまいま

した。あきらめてまたとほとほと歩くことにしました。そして、約一〇〇ぶぐらいは歩いたでしょう。後方から馬に乗って大きな声で「先生——」「先生——」と言って近づいて来ました。彼の青年でした。青年は帰って皆のことを家族に話すと「家につれてきてよい」とのことでした。私は、地獄に仏とはこういうことかと本当にありがたい気持ちでした。生徒たちも足取りが軽くなり、間もなく彼の家につきました。

私たちが彼の家に着く頃には、御家族の皆さんたち、叔母さんが一生懸命にそば粉をこねており、囲炉裏には火をたいいて私たちが着くのを待っております。大変ありがたく忘れることはできません。生徒たちの濡れた服を一人一人渡して乾かしていただきました。そして一晩泊めていただきご馳走までしてくださいました。本当に困っていた時でしたので、感謝感激でした。翌朝御礼を述べ皆元気で学校まで帰り着くことができました。二三日後、私と森田先生と二人で伺ったことを覚えておりますが、残念なことに集落名は忘れてしまいました。このお世話になった青年は確か「吉良さん」という姓でした。この方のお名前は絶対に忘れることはできません。その後四〇年以上打ち過ごしてまいりましたが、当時の青年「吉良様」は今も六〇歳以上になっていると思います。御元気でいらつれば是非お会いしたいものです。そして遅まきながら心からお礼を申し上げたいと思っております。

* 「榎木野会」榎木野小学校再訪の平成元年一〇月一五日大城孝成氏は「吉良さん」(仁田水吉良吉治さん)と再会、往時を思いお互いに感激の涙に咽びました。

その後沖繩「榎木野会」と榎木野小学校の交流は深まり榎木野会からは毎年図書などの贈呈があり文通を重ねている。

榎木野小学校の皆様へ

下 地 幸 子(旧姓新垣)

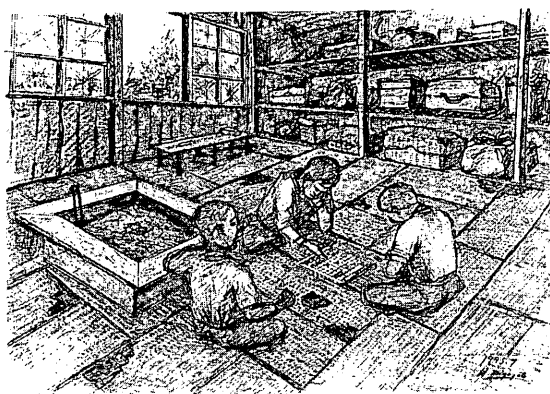
第二のふるさと「沖繩からの学童疎開について」を読ませていただきました。皆さんが今から四十九年前の学童疎開に就いて学習していることにすごく感動しております。今でも榎木野の小学校、お宮、役場、滝水の駅等々当時の姿がありありと脳裏に浮かんでまいります。私はその頃阿蘇高等女学校(現県立阿蘇高校)の一年生に在学中でした。早朝六時過ぎに発ち夕方帰校という日課でしたので榎木野の皆様と接することは少なかったのですが、いろいろなことが鮮明に残っております。一期先

輩に阿南さん、佐伯さん、斎藤さん、町子さん、四年生に佐藤愛子さん、同期生に榎木野さん等の方々。が汽車通学で滝水と宮地間を御一緒したと記憶して居ります。

女学校に入学したとはいってもほとんど勉強することもなく、来る日も来る日も奉仕作業という野良仕事、鎌や鍬に慣れるのにそれはそれは大変なことでした。文集の中に佐藤勝彦さんが書いてある滝水の職員さんが機銃掃射を受けて亡くなられたお話(昭和二〇年七月三日波野駅東方数百の線路上)私たち女学生はその線路のすぐそばで作業をしており、皆泣きながら畑の畝の中に伏したのを憶えております。その日は警戒警報さえなく何の前ぶれもなく、それこそ突然飛んできた飛行機に日本軍の戦闘機だと勘違いしたほどです。余りの低空で操縦士の顔も見えた程です。地上で逃げ惑う私たちを見送る前でしたかはないと今でも思っておりますが、子供を撃てない良心を彼らは持ち合わせていたのでしょうか。お昼休みにはいる前でしから一四、五〇分位でした。不幸にして亡くなられた職員さんの御遺体には当然私も全員合掌いたしました。二〇才前の若い方だったと記憶しています。幾日も経たずして終戦を迎えました。昭和二〇年八月一五日終戦の玉音放送(天皇陛下の言葉での放送)を聞いたのも波野駅前の広場でした。雑音だらけのザラザラした音はとても言葉の意味も解せない様な放送でしたが、一緒に直立不動の姿勢で聞いていた将校がポロポロと涙を流していたのが、波野の青い草原とダブって心にのこって居ります。

戦争とは実にむごいことです。戦前私たちが受けた教育は何と間違いだらけのものだったことか。日本は世界で最強の国だと信じて疑わなかったのですから。戦争が終わりすぐ帰れると思った故郷沖繩が戦勝国アメリカの統治下におかれることになり、またく帰郷が延びる事に決まった頃、私の身边にも大変不幸な事が起きていたのです。医師だった父、そして母、幼い妹、弟迄も戦争の犠牲者になってしまったのです。三才違いの兄と三才下の弟が縁故疎開で十分にきておりましたので、私たち三人知らぬ間に孤児になってしまったのです。でも私たちが受けた不幸ではありません。周囲にはもっと悲惨な状態の人々がたくさん居りました。あの頃からやがて五〇年、筆舌につくせない思いをしつつ今この平和な時を大切に思っています。居ります。榎木野小学校の皆さん平和学習をずっと続けてください。たくさん本を読んでください。日本のことを良く知り、世界のことをより多く知り人類が皆仲良くできるよう皆で考え戦争の無い平和な時代、世界中の人たちが皆仲良くできる時代が貴方達に訪れる事を信じて居ります。近いうちに榎木野のあの懐かしい道を歩きたいとおもっています。

波野村の教育



将棋で遊ぶ



鳥籠や草履を作る

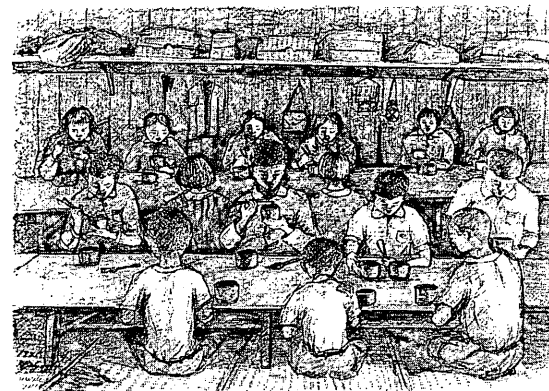


火鉢を囲んで

雨の日や寒い日には外に出ることができないのでとても寂しくひもじさも増し、お腹がくっつくみたいで、それをまぎらすために男は将棋やトランプをやり、女子はトランプや編み物をした。天気の良い日は、薪取りや畑仕事もしたが、鳥籠や草履を作ったりもした。寒い日、木製の火鉢をかこみ、寒さをしのいだ。大きな火鉢で一五、六人で囲むこともあったが、薪を燃やしすぎ火鉢の底を焼くこともあった。



疎開の時生活した宿舍



食事の風景

疎開当時の回想
 植木野小学校に小学校六年生で疎開して生活しました。これは当時を回想しての絵と想い出です。ほとんど毎食具の少ないみそ汁であった。沖繩から持ってきたお碗は破損し、竹製のお碗を使用した。そのお碗の底が竹の節の関係で、凹凸があり、食事の席につくとこっそりお碗の底をさわっては一喜一憂したものです。

宮里 宏

遊雀小学校の思い出

沖繩遊雀会 与那覇 政和

今から丁度三〇年前昭和一九年八月一九日第二次大戦の余波を受け、学童疎開の一人として、首里第二国民学校の四年生だった私は他の学友と共に、疎開船、暁空丸に乗り江尻丸、対馬丸の二船と共に駆逐艦の護衛を受けながら沖繩を離れた。途中、僚船、対馬丸が敵の潜水艦の攻撃をうけ沈んでいくのを後にしながら長崎を経て阿蘇郡内牧にやってきました。

戦争が激しくなり、内牧駅が焼け、田んぼに焼夷弾が落ちるようになり、二人の先生と六〇余名の学童が第二の疎開地、波野村遊雀小学校に身を落ち着けました。当時の遊雀小学校は、カヤ葺二棟、トタン屋根が一棟の六教室の小さな学校でした。



沖繩の疎開



沖繩遊雀会来村の歓迎式

六教室のうち三教室が私たち疎開者の二ヶ年にわたる生活の場となったのです。寒い朝、その阿蘇が一番高いところであり、九州が一番寒いと言われている遊雀での思い出は、一口に言えば寒さと、ひもじさの毎日でした。電気の無い寒い冬の夜、お互いの身体を抱き合い暖をとり、また水道が無く、凍てついたツルベで泣きながら水を汲んだものです。ひもじさに耐え兼ねて、山口さん岩下さん市原さん後藤さん等の家へ食物を求めていったものです。人間の本能的な行動だったのでしょう。このような苦労があったればこそ、子供心にも遊雀での毎日毎日が昨日の

事のように三〇年過ぎたいまでもはつきりと私の心に残っています。春になると霜焼けした手をこすりながら、校舎の壁に寄り添い雲の切れ間からもれる陽の光りを眺めながら、春一番の吹く日待ちわびていた日々、秋には堀沿いにあるアケビとりや、立塚の杉林の近くにあってグミを口が真赤になるほど食べたこと、哀愁を帯びた山鳩やカンコ鳥の鳴き声、牛をつれて牧場に行くときダニが足から這い上がって来てびっくりしたこと、横堀の後藤さんのジャが芋堀の手伝いにいって腹いっぱいジャが芋を食べた思い出、全てのこと幼い日の思い出となって心に深く刻み込まれています。今回遊雀小学校創立百周年記念祭に沖繩遊雀会の代表として訪れることが出来、三〇年振りに見る我が心のふるさと遊雀が、昔と変わらぬ人々の恩情、山々の姿に接し涙の出る思いがいたしました。これを機会に沖繩と遊雀のつながりを密にし遊雀会の発展に寄与する所存でございます。

……昭和四九年一月遊雀小学校百周年記念祭の折……

あれから五十年―村史の一枚学童疎開―

沖繩遊雀会 久手堅憲夫

いま宮地の駅前からタクシーで十五分、一瞬のうちに遊雀につく。私たちが学童疎開で集団生活をしていた一九四五年（昭和二十）当時、遊雀から宮地までは、箱石峠を越えて雨の時には川になる谷間の険しい道を下り、二時間近くはかかったろうか。勿論徒歩である。あれから五十年。道路はアスファルト舗装され、全く隔世の感がある。

第一次疎開地の内牧の駅舎も、爆撃で全焼し、私たちが機銃掃射に追われ、焼けつくような火山灰の道をたどり、六十余名の者が再疎開の地遊雀に着いたのは、一九四五年の梅雨明けの七月であった。

海拔七五四m、九州一高い高原の駅、波野駅に降りたち、線路を渡って、駅舎の反対側の牧場のなかの野道を上りつめる。一面の茅野が風に吹かれて大きく波うっている。遊雀校の校歌にいう『波野が原』に圧倒され、まだ見えぬ落ち着き先を考え、全く、遠くへ来たもんだ」と、一段と寂しさが湧いた。

稜線と畑の間の道路に横畝を立てたような、子供には全く歩きにくい『馬ジャクリ』の道をトボトボと歩き、いくつかの丘や峠をこえ、目的地の遊雀に着いたのは、陽射しが柔ぎ始めた午後三時を過ぎた頃であつたらう。火山灰の道は、幅射熱で未



昭和26年1月2日「沖繩遊雀会」の第一回集
い沖繩南条みよしベレー研究所にて

だ熱い。沖繩の学童の疎開地では、何処でもそうであったと聞くが、沖繩の子供たちは、裸足で来る筈だからと、遊雀の婦人たちは善意で草履を準備しておられたようで、私たちが「全員靴を履いてきたので、草履を背後へ隠したものだ」とは、後の日に、農作業の手伝先の小母さんの話であった。

太平洋戦争さえなければ、沖繩出身者と出会う機会とてなく、また沖繩が何処の地にあるかさえ知り得ず知る必要とてなかった事で、全く止むを得ない話してある。

屋根を葺いて六十年は経ったといわれた茅葺きの校舎二棟・黒塗リトタン葺き校舎一棟。三棟の校舎が全ての遊雀小学校のうち、トタン葺き校舎一棟と茅葺棟にある職員室の三分の一ほどが、私たちのために割かれた。

トタン葺きと茅葺き校舎の間の渡り廊下の奥に炊事場があり、トタン葺き校舎の裏手に、茅葺き茅壁、落し口は杉丸太を渡しただけの便所が、私たちのために急造されてあった。

校地の北西隅に井戸はあるにはあったが、湧水量が極めて少く、私たち集団の使用には到底堪え得なかった。そこで、東隣りの宅地の垣を越え、廃屋の裏手にある長年使用されていない、とてつもなく深い古井戸の水を生活用水とすることになった。何故かこの古井戸からは、灰色にくすんだ尾長蛆も湧いて出たが、水のとほしい当時の遊雀では我慢するしかなかった。

今日の遊雀の生活からは想像もつかないことだが、当時の遊雀校区には電灯がなかった。敗戦色の濃くなった時期、物資は底をつき軍需物資の最たるものの石油などあるう筈もなく、ランプの灯しようもない。囲炉裏大の特製火鉢に、杉の小枝をくべて灯りとした。病人の看病など、必要最小限に蠟燭を灯火とした。

波野村は地理的に九州のほぼ真中に位置する。夏の真昼間、裸足で土を踏めば、火傷をするほどの焼熱地獄である。それが夜に入ると、幅射熱の放射冷却によって気温が急降下する大陸性気候で、第一次疎開地の内牧では経験しなかったことで、夏

の夜も冬布団を使用するという生活は、南国育ちの沖繩の子供たちをドギマギさせた。

便所は先述した急拵えのもので、少々の雨露は凌げても、冬場は雪が、屋根と茅壁の間から用捨なく吹き込む。茅壁の曲いはあってないようなもので、思春期に入った女生徒など、陽が落ちて暗闇のなかを連れだつて用便をする状態であった。

便所の汲取りは、男女の別なく上級生の分担で、夏の作業は、杉丸太をはずし普通に出来たが、マイナス十四、五度の気温の冬場は、うす高くカチンカチンに凍った排泄物を鍬で打ち砕いて片付ける。その破片がところかまわず飛散し、身体中に附着し溶けて臭くなる。悴んだ手に鍬を握つての冬の排泄物処理作業は、臭気の附着する重労働で、男子上級生のみが分担したように思い出すが、苦痛の最たるものだった。

古里の学校教育で「方言撲滅・標準語励行」を強制された沖繩の子供たちを驚かしたもう一つのものに、遊雀校内での言語生活があった。遊雀校では、教師も生徒も「本を読む」以外、授業中の教師の設問も、児童の答弁も、全く方言で行われていたことである。その裏返しに、沖繩の子供たちは、本のこつものいよる」と、遊雀の人たちに不思議がられた。はからずも、沖繩の学童疎開は、当時の沖繩の為政者や教育の要路にあった一部官僚の自己卑下、徹底した皇民化教育を具体的に示す一例となった。

順応性の高い育ち盛りの子供たちは、比較的容易に熊本方言を会得し、農作業手伝い・日常会話には不便を来たさない。しかし大人たちは、そういう訳にはいかなかった。遊雀校の教頭先生と引率の安村良旦先生は、黒板に板書を交えながら会話をする様であった。

遊雀に来て一ヶ月ほど経った。「日本敗れたり」、時の山本晴雄校長が、校区中を一陣の風のように乗馬で駆け抜ける。当時の遊雀には、学校にすら電話がなかった。最も早い伝達手段は「早馬」であった。

一九四五（昭和二十）八月十五日。軍部の強力な情報管制のなかでも、アメリカ軍に沖繩は占拠され、県民は「玉碎」したとの情報は、何処からともなく洩れ聞いて、子供たちも知っていた。先の見通しもなく遣り場のない憤りが、一時期子供たちの日常を支配した。敗戦初期の動揺が収まり、子供たちの感情に稍々あきらめを伴った平静さが戻った頃、安村良旦先生の独創的な寮経営が始まった。

これより先、第一次疎開地の内牧では、宿舎の旅館主が食糧一切を管理。沖繩から随伴した世話人は、ただそれを炊飯する

というパターンで、引率の教師も児童の教育が主たる任務で、子供たちの食生活にまでは容喙しないという態度が、大多数の姿であった。子供たちも、空腹をかかえながらも、教室で授業を受けるといのが日常であったが、遊雀に来てからは、全く自己管理の生活が始まった。

主食のトーキビ（トモロコシ）と調味料の塩は、四キロ以上はなれた波野駅近くの食糧営団出張所まで上級生が出向き、二人一組みの棒中荷にして担いで運び、地元から貸与された石臼で、班毎の当番制で、日長一日トーキビを引く。米食ではなくトーキビが主食であった。それは、当時の遊雀の村人も同じであった。

喰気盛り、育ち盛りの子供たちに満腹感を与えるほどではなかったが、旅館の管理飯より、量が増えたことは確かであった。遊雀へ再疎開してからは、学習どころではなく、全体が生きていくうえでの作業中心であったが、敗戦の八月十五日を境にした、安村式寮経営では、五、六年生以上高等科一、二年（現在の中学一、二年）までの上級の男生徒は、農作業の手伝い、女生徒は、子守りや家事手伝いなどで、積極的に農家へ分宿させ、それで浮いた分の食糧を、農作業の手伝いへ出向くことの出来ない、下級生など寮の全員に廻し、少しでも多く食べさせるといふ仕組みを採った。

遠く福岡などへ出た子は一月一辺も帰らなかったが、近隣の農家の援農分宿組みの学校での授業は、一週二時間―月曜日の午前だけであった。

また荒蕪地を借り受け積極的に開墾し、大豆などの雑穀を栽培するなどして、食糧の補いとした。

安村式寮経営の基本は、寮生とくに上級生を如何に積極的に寮経営に参加させ、全寮を明るく生活をより豊かにするかにあった。その一つに子供たちへの小遣いの支給がある。その資金源は国からの薪炭料であった。子供たちに杉の枯れ枝を拾い集めさせて薪とし、薪拾いの労働の対価として、国からの薪炭料を、学年毎に格付してそれを個人別に積み立て、遠足や外出時に小遣いとして支給した。

遊雀は、四月になつても尺余（三、四〇cm）の雪が積もるほど、冬が長く寒さの厳しい村であった。校庭の一隅の菜園に、縦二m、横一m弱、深さ一mほどの穴を掘り、孟宗竹を煙突にした、安村式炭焼窯も、結構火持ちのする良質の木炭がとれた。子供たちも、それなりに手先の器用さを発揮し、学校の裏山の杉林の中の孟宗竹を伐り、烏籠、スプーン、ホーク等を作って農家へ持ち込み、小麦粉やそば粉と交換して、『自家食料』とした。また破損した腰掛けの背に孟宗竹製のスキーを付け、繰

にして雪上遊びを楽しんだ。いよいよ沖繩へ帰る時期の決まった或る日、遊雀校と校区へのお礼に、演芸会をやることになった。演目は、男生徒は、コント、僧侶と医者、落し者、女生徒は、南条みよし（安村夫人ヨシ）振付けの洋舞『両降りお月さん』ほか。安村先生の講演。南条みよし女史の洋舞『椰子の実』等々。遊雀校の職員、生徒をはじめ、大勢の村人が見に来てくれ、一層親近感を増した。

安村式収斂術は、子供たちを見事に掌握し、沖繩の家族に思いを馳せ、稍々もすると沈みがちな子供たちを、明るく快活にさせ、遊雀での生活を、思い出多いものにした。純朴は遊雀校区の村人は、私たちを普通にあつかってくれた。小人数で、それほどの悪さをしなった所為もあって、第一次疎開地の内牧と、その周辺部に見られた排他的な『沖繩者』あつかいはなかった。人間の性善説に依るからでもなからうが、五十年前の想い出は純化されて、『乏しく。寒く。寂し』かったであろう当時の生活が、まるで仏教の隠者にまわりつく子供たち同様に、夢の中の出来事でもあったかのように蘇ってくる。

私たち六十余名が、全員無事故で古里へ還れたのも、遊雀校区の村民の御支援があったればこそで、全く感謝に堪えない。三ヶ年の集団疎開生活を経て、一九四六年（昭和二十一年）十一月に帰り着いた古里の古都首里は、首里城と共に徹底的に破壊し尽され、山容あらたまるどころか、草木一本すら止めず、白い岩肌をむき出しにした惨たらしい姿に変っていた。古里での生活も、天幕小屋の零からの出発という厳しいものであったが、私たちは、遊雀での絆を忘れることはなかった。帰郷四年、まだ平静に戻ったとは言えない沖繩の社会情勢のなかで、四十名の仲間が集った。沖繩遊雀会の胎動期であった。その日は一九五一年（昭和二十六年）一月二日。記念写真の裏に、こんな幼稚な句が記されている。

諸々の友が集いて語らうに
彼方（熊本）は雪かまた霰れるか
今、毎月十余名の中心メンバーが集い、折りに觸れ沖繩遊雀会としての全体的な動きをみせている。

遊雀での生活体験は、私たちの個々人に、物事に耐える力―生きるたくましさや培ってくれた。それは、それぞれの社会生活の力強い基盤となつて、五十年後の各人の今日を築いてきた。私たちの奇しきこの体験は、恣意的に選択できることでもな



小学校修身書（明治33年頃）

く、個人が強く希望すれば実現することでもない。しかし再びあらしてはならない政治的事象である。
 いま遊雀は、煌煌と電灯が灯り、水道栓をひねると、勢よく水が迸る。『村』から『村』への村内道は、全くアスファルト舗装され、波野村の北辺に九州山並みハイウェイが通っている。第二の故郷波野も、敗戦五十年一大変貌を遂げた。まさに『世変わり』である。
 私は毎年自家用のジャガタを栽培する。その種蒔は波野産である。何か因念めいたものを感じる。我が家の茶の間には、岩下平助氏寄贈の根子岳の山頂に冠のようにかぶさった、阿蘇の爆発瞬間の噴煙の写真がある。平助兄を通して、遊雀と沖繩遊雀会との交流は続く。池部芳明教諭は遊雀校在勤中に、私たちの疎開生活の体験を、平和学習の一環として劇化し、五、六年に学習発表させた。
 不思議な縁の波野と沖繩のこの絆を大切に、力を合せて何時までもこの有難たい平和を守り通さねばならない。農山村が置き忘れられ、打ち捨てられることのないために。子供たちの未来が明るく豊かである政治や社会をめざし、波野村が、国民のための食料の一大産地として豊かになり、静かなたたまいの永からんことを願って止まない。

第四節 戦後の教育

一 第二次大戦後の教育改革

第二次世界大戦の終結によって日本の教育は占領軍の管理下におかれ、昭和二十一年にアメリカ教育使節団が来日し、その報告書が戦後日本の教育改革についての基本方針を示した。そして、昭和二十二年、教育基本法と学校教育法が制定されて新しい教育制度が実施された。いわゆる六・三・三・四制で、六年制の小学校、三年

制の中学校、三年制の高等学校、四年制の大学からなるものである。

初等教育については従来の国民学校に代わって再び小学校という名称がとられ、六歳から一二歳までの六年課程をもつ事になった。国民学校の高等科は廃止されて新しく三年制の中学校が設けられ、義務教育の年限は中学校三か年を含めた九か年に延長された。中学校が三か年の教育として確立したことは明治五年の学制に次ぐ大改革である。そして、中学校も小学校と同様男女共学の原則をとることとなり、市町村が区域内の学齢生徒を就学させるに必要な小中学校を設置する義務を負う事になった。また、高等学校は全日制課程（三か年）

のほか定時制（四か年）と通信制の課程を設けた。さらに、高等学校への進学を円滑にし、教育の機会を均等にするために高校の通学区域を指定する学区制が設けられたことも特色の一つである。中学校卒業者の高等学校進学率は昭和二五年（一九五〇）の四五、五％から昭和三九年の七〇、六％と上昇し現在では一〇〇％に近い状態となった。また、特殊教育としての盲学校、聾学校、養護学校を設けることを府県に義務づけ、普通の小・中・高校に特殊学級をおくことも行われるようになった。

二 教育委員会の発足

教育行政については、文部省を中心とする従来の中央集権的統制